

## 養育者の統制的養育態度が中学生の内的要因を介して反社会的行動に及ぼす影響

—重要な他者の態度は養育態度の影響を低減させるのか—

小島 朱理

キーワード：反社会的行動 養育態度 重要な他者の態度

### 問題と目的

先行研究において、社会的認知バイアス (Barriga & Gibbs, 1996) や共感性 (Mitsopoulou & Giovazolias, 2015)、社会的自己制御 (原田・吉澤・吉田, 2009) が、反社会的行動に影響を及ぼすことが示されている。

さらに、子どもの育つ環境が内的要因に影響を及ぼすという研究もされてきた。浅野他 (2016) は、養育者の受容的養育態度・統制的養育態度が共感性を高め、社会的認知バイアスを低くすることを示唆した。また、養育者の養育態度が社会的認知バイアスを低くし、社会的逸脱行為を抑制することも示されている (吉澤他, 2017)。

一方で、養育者の厳格で統制的な養育態度が他者に対する共感性を低くすることを示した研究もある (大川・出口・大西, 1997; 江口, 2014)。また、伊藤・小澤 (2014) では、規範意識と親からの理解、ならびに家族交流との間に正の関連があることが示唆された。規範意識が低いとき社会的認知バイアスが高いことが推測されることから養育者の統制的養育態度と社会的認知バイアスには負の関連があると考えられる。拒否的な養育態度が共感性や道徳不活性化を通して反社会的行動につながることも示されている (Hude, Shaw & Molilanen, 2010) ことから、統制的な養育態度が共感性の低下や社会的認知バイアスの上昇を介して反社会的行動につながる可能性が考えられる。また、養育者の統制的な養育態度が自己主張や自己抑制を低くすることも示されており (江口, 2014; 戸田, 2006)、両側面を含む社会的自己制御は養育者の統制的な養育態度の影響を受け低くなると考えられる。以上のことから、養育者の統制的な養育態度が共感性や社会的自己制御、社会的認知バイアスを介して反社会的行動に影響を及ぼすことが推測される。

しかし、周囲の人々の態度も内的要因を介して反社会的行動に影響を及ぼしており (吉澤他, 2009; 金子, 2012)、教師の指導が養育者の影響を調整することも示されている (伊佐, 2010)。したがって、養育者の統制的養育態度が子どもの内的要因を介して反社会的行動に及ぼす影響は、重要な他者の態度によって変化すると考えられる。

本研究の目的は、①養育者の統制的養育態度が中学生の内的要因を介して反社会的行動に及ぼす影響について

検討することと、②中学生にとって家族以外の重要な他者の態度が、養育者の統制的養育態度と中学生の内的要因との関係に及ぼす影響について検討することである。

### 方法

**対象者** 愛知県の中学1~3年生605名に質問紙調査を行った。回答に不備のあった者を除外し、分析には352名 (男子154名, 女子198名) を用いた。

**測定項目** 中学生への負担を考え、調査は2回に分けて行った。各担任に、事前に渡した調査の説明書に基づいて進めるよう依頼した。1回目では、子どもの認知する親の養育態度尺度 (姜・酒井, 2006) と、同尺度を身近な他者について当てはまるよう表現を変えた子どもの認知する重要な他者の態度尺度、Social Self-regulation 尺度 (原田・吉澤・吉田, 2008) について回答を求めた。2回目では、青年期用多次元の共感性尺度 (登張, 2003) と、認知的歪曲尺度 (吉澤・吉田, 2004)、社会的迷惑行為尺度 (河野・岡本, 2013) について回答を求めた。

### 結果

**尺度** 各尺度について因子分析を行った結果、Social Self-regulation 尺度は、「意欲・根気」( $\alpha = .83$ )、「自己主張」( $\alpha = .86$ )、「責任感・欲求抑制」( $\alpha = .70$ ) の3因子が得られた。その他の尺度は、確認的因子分析により一定以上の当てはまりを示していたため、元の因子構造を採用した。

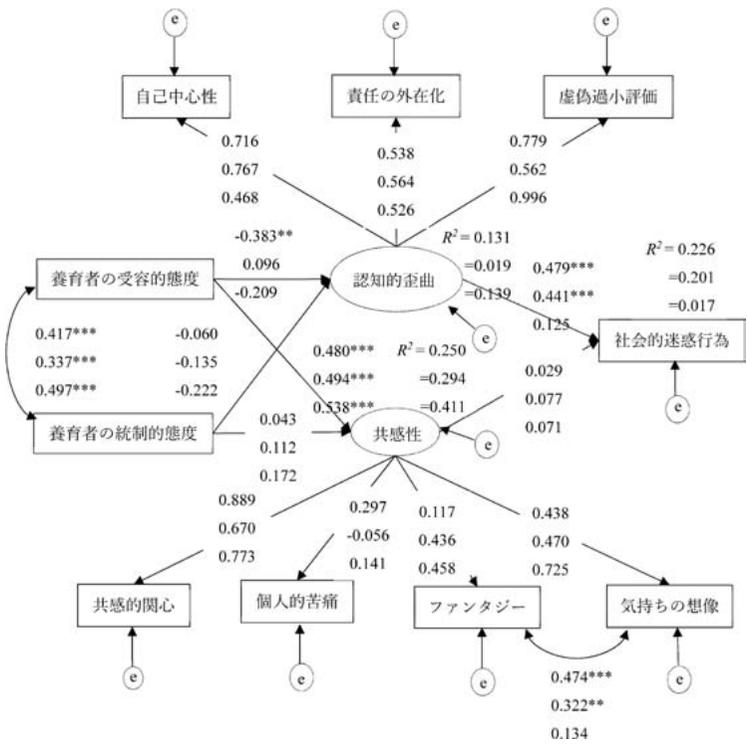
**仮説の検討** 各変数の記述統計量と変数間の相関関係は Table 1 に示した通りであった。構造方程式モデリングを行って得られたモデルの学年差と性差を検討するため多母集団同時分析を実施した結果、学年差がみられた ( $\Delta\chi^2(22) = 49.09, p < .001$ )。学年別の影響を表したモデルは Figure 1 に示した通りであった。

次に、重要な他者の態度と養育者の養育態度が中学生の内的要因に及ぼす影響について検討するため階層的重回帰分析を行った結果、認知的歪曲、共感性ともにステップ1からステップ2にかけての説明率に変化は見られなかった。また、Figure 1 のモデルに対して重要な他者の態度が影響を及ぼしているかを検討するため、重要

Table 1. 各変数の記述統計量と変数間の相関関係

	平均	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
1.性別	1.54(0.50)	-										
2.年齢	13.64(0.92)	-0.01	-									
3.学年	1.93(0.79)	.03	.36***	-								
4.養育者	2.03(0.42)	.05	.02	.00	-							
5.養育者の受容的態度	45.49(9.71)	.18***	-.17**	-.13*	.04	-						
6.養育者の統制的態度	28.18(4.43)	.04	-.12*	-.11*	.05	.42***	-					
7.親友他者の受容的態度	41.34(8.01)	.07	-.04	-.04	.00	.30***	.20***	-				
8.親友他者の統制的態度	25.16(6.34)	-.07	-.07	-.10	-.03	.13*	.40***	.35***	-			
9.社会的自己制御	54.78(8.97)	-.02	-.07	-.08	-.11*	.33***	.21***	.29***	.14*	-		
10.共感性	91.84(13.37)	.27***	-.03	-.03	.04	.46***	.21***	.21***	.06	.27***	-	
11.認知的歪曲	32.32(9.89)	-.06	.03	.06	.10	-.18***	-.14**	-.12*	-.15**	-.38***	-.21***	-
12.社会的迷惑行為	19.17(5.34)	.06	.05	.03	.04	.02	-.02	.06	-.02	-.18***	.01	.32***

\* $p < .05$ , \*\* $p < .01$ , \*\*\* $p < .001$   
 1) 男, 2) 女  
 4) 1. 父, 2. 母, 3. 祖父, 4. 祖母, 5. その他  
 5-動) 1. あてはまらない→3. あてはまる  
 9, 10) 1. まったくあてはまらない→3. よくあてはまる  
 11) 1. まったくあてはまらない→4. ひじょうにあてはまる  
 12) 1. まったくない→5. かなりある



上段=1年生, 中段=2年生, 下段=3年生

Figure 1. 養育者の養育態度, 中学生の内的要因と社会的迷惑行為の学年別プロセスモデル

な他者の態度を中央値を基準に高群・低群に分け, 多母集団同時分析を行った。その結果, 群間に差は見られなかった。

考察

1年生では, まだ養育者の影響を強く受けることから養育者の養育態度が内的要因を介して反社会的行動へと

結びつくが, 2年生では友人など養育者以外の影響を受けやすい時期であることから, 養育者の養育態度から内的要因へ影響があるとはいえなかったと考えられる。3年生では, 部活動の引退などにより養育者との時間が増えることや進路のことを意識する時期であることから, 2年生に比べて養育者の養育態度の影響を受けるが反社会的行動へは結びつかなかった可能性がある。